

# 学校外スポーツ活動の「場」の選択に関する実証的研究

第19回日本スポーツ社会学会 岩手大会 2010/03/29

ベネッセ教育研究開発センター ○鈴木尚子 木村治生 佐藤暢子

本報告の第一の目的は2009年にベネッセ教育研究開発センターにより実施された「学校外教育活動に関する調査」の調査結果をもとに、小中学生の学校外スポーツ活動の実態を明らかにすることである。第二の目的は、小中学生がスポーツに参加する「場」の特徴をとらえることにより、今後、子どもの学校外スポーツ活動の「場」が変化した場合に生じうる課題を明らかにすることである。

## 1. 背景

ベネッセ教育研究開発センターでは2009年3月に3歳から17歳の子どもを持つ母親、約15,000名を対象に子どもの学校外教育活動について調査を行った（詳細はベネッセ教育研究開発センター『子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック』2009参照）。今回の発表では、このうち、小学生と中学生のスポーツに関連する項目を中心に分析した結果を報告する。このデータを用いて3つの段階に分けて明らかにしたいことは次のようである。最初に、どのくらいの小中学生が、どのような場においてスポーツをしているか、また、していないかというスポーツ活動の実態を確認する。つぎに、参加しない子どもと参加する子どもの特徴をとらえることにより、子どものスポーツ参加に影響を及ぼす要因をとくに保護者のかかわりの視点から検討することである。最後に、参加する「場」を軸にして、それぞれの「場」と保護者のかかわりの特徴をみることによりそれぞれの「場」が果たす役割を整理することである。

本研究で「場」に注目する背景には、近年子どものスポーツの「場」が変化を求められていることがある。西島（2006）によれば、中学校では2002年改定の学習指導要領におけるクラブ活動の廃止により、クラブ活動はその法的根拠が失われ、部活動が活動の規模を縮小せざるを得なくなっているという。さらに、学校・家庭・地域社会の三者関係の見直しにより、部活動は、地域の社会教育や社会体育施設、民間企業の習いごとの教室やスポーツクラブと連携やそれらへの移行が求められている。2012年に改定される学習指導要領では、「部活動については、（中略）学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と再度位置づけられたのち、「その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること」との文言が添えられている。つまり、中学校段階の部活動は、指導要領には再び位置づけられたものの、地域の人々や社会施設との連携など、運営上の工夫が求められている。中学生のスポーツが、部活動中心であることに急激な変化がもたらされることは考えにくいだが、部活動から地域スポーツなどへ「場」の移行や部活動への保護者の参加が求められるなど「場」に関係する人々が変化していく可能性は高い。

子どものスポーツ活動において学校・家庭・地域の関係の見直し、連携、移行などが求められる状況において、子どものスポーツ活動の中心となる、民間、地域、自治体、学校の果たす役割や特徴を整理し、活動の「場」の移行や「場」の変化がもたらしうる課題を検討する必要性は高い。

子どものスポーツ活動の参加・不参加を規定する要因については、先行研究の蓄積がある。まずはこれらを振り返る。子どものスポーツ参加に影響を及ぼす要因についての先行研究には、山口・池田（1987）、

中澤（2008）、片岡（2010）などがある。山口・池田（1987）は、その研究の中で日本の子どものスポーツ参加に対する両親と友人の影響を指摘している。中澤（2008）は、子ども自身の運動能力の自己認識（個人的特徴）とともに、親自身の活動状況、家庭の経済状況、親の学歴や職業などの家庭背景に注目した。片岡（2010）による「学校外教育活動に関する調査」データを用いて行った決定木分析でも、世帯年収、母親のスポーツ志向、父母学歴が子どものスポーツ活動を規定する要因として浮かび上がった。これまでの研究で要因として挙げられてきたものは、性別、子どもの運動能力の自己認識のほかに、親の志向、家庭の背景（経済状況、親の学歴）が中心となる。

これらの先行研究をふまえたうえで、今回、分析の際に注目したのは「保護者にかかる負担」である。この点を加えた理由は2つある。第一に、子どものスポーツ活動が一般成人のスポーツ活動と大きく異なる点の1つに、活動における保護者の影響の大きさがあると考えられるためである。<sup>1)</sup> また、第二に、子どものスポーツ活動と「保護者にかかる負担」の関係は、経験的に広く認識されていることである。しかし、スポーツ活動の規定要因を探る研究では、「保護者にかかる負担」は、これまでほとんどかえりみられることがなかった。

## 2. 分析枠組

### <従属変数>

分析における従属変数としてあつかうのは、子どもの参加・不参加である。参加の場合には、活動の「場」により民間経営、地域ボランティア運営、自治体・公益法人運営、学校の4種類に分類し、この変数を分析の対象とした。今回の分析の目的を考慮し、スポーツ活動を2種類以上または2つ以上の場でスポーツをしているサンプルは分析の対象から除外した。（例えば、学校と地域の両方でサッカーをしている子ども、民間のスイミングクラブと民間の空手道場で活動している子ども）

なお、この4つの「場」にしばって分析を行う理由は、小学生と中学生のスポーツ活動の「場」の多くをこの4つが占めるためである。さらに、これらの4つの「場」は、今後の学校・家庭・地域社会の連携の動きを考えるうえで重要だろう。

本報告中では、子どもの活動状況について参加（者）・不参加（者）と表現している。これは子どもの活動状態であり、調査の回答者である母親の活動状況ではない。

### <独立変数>

分析における独立変数として取り上げるのは、先行研究をふまえ、①子どもの性別、②家庭の経済状況、③父母の学歴、④母親のスポーツ志向である。また、お金と時間という子どものスポーツに伴う保護者の負担を示す、⑤費用の負担、⑥応援・手伝いの負担である。今回は「保護者にかかる負担」を中心にみるために、①子どもの性別～④母親のスポーツ志向を再度確認したのち、⑤費用の負担、⑥応援・手伝いの負担と子どものスポーツ活動状況の関係をみてみたい。<sup>2)</sup>

### 3. 方法

#### <データ収集>

本報告で使用するデータは、2009年3月時点で3歳～17歳の子どもを持つ全国の母親を対象として実施したインターネット調査に基づいている。調査会社が抱える約83万人のモニター母集団のうち、子どもを持つ既婚者（20歳～59歳）9万名に対して予備調査を実施。このうち1991年度～2005年度生まれの子どもを持つ母親にアンケートの協力を依頼。各年度生まれの男子、女子を持つ母親それぞれ515名のサンプルが集まった時点で調査を終了した。回答者に子どもが複数名いる場合には、第一子についての回答を求めた。属性の詳細は、ベネッセ教育研究開発センター（2010）のp4～7を参照のこと。

質問項目は、スポーツ活動の実施の有無、活動種目、頻度、活動の場、費用、母親の意識、活動の負担、家庭背景など多岐にわたる（調査票は同（2010）p90～105）。

#### <使用する変数>

参加・不参加は「この1年間で、お子様が定期的にしていただいていた運動やスポーツはありますか（ありましたか）」と尋ねた設問の回答を使用する。2008年度の活動についてのみ尋ねており、過去の経験などは含まれない。

参加する「場」については、子どもがスポーツを実施している「場」について、活動するスポーツの種目別に回答してもらった。今回「民間経営」と記しているのは、「民間企業が経営する団体・教室」「個人が経営する団体・教室」を合わせた「場」のことである。「地域ボランティア運営」は「地域や保護者のボランティアが行っている団体・教室」のことである。「自治体・公益法人運営」は「自治体が運営する団体・教室」「公益法人やNPO法人が運営する団体・教室」である。「学校の部活動」は同じ文言の選択肢を用いた。なお、「学校の放課後活動」など、このほかの「場」でスポーツ活動を行う場合は、今回の分析の対象外とする。

独立変数として投入する①子どもの性別、②家庭の経済状況、③父母の学歴、④母親のスポーツ志向、⑤費用の負担、⑥応援・手伝いの負担は、それぞれ次のようである。<sup>3)</sup> ②家庭の経済状況は、家庭の世帯年収（税込）を尋ねた設問による。わからない、答えたくないなどと回答したものはデータから除いている。③父母の学歴は、父親、母親の最終学歴を尋ねた設問による。父母ともに、短期大学卒業以上を大卒とした。④母親のスポーツ志向は、「あなたご自身は、次のようなことが好きですか」という設問の「身体を動かすこと」の項目による。「とても好き」「まあ好き」の回答を「スポーツ志向あり」、「どちらとも言えない」「あまり好きではない」「まったく好きではない」の回答を「スポーツ志向なし」とした。⑤費用の負担および⑥応援・手伝いの負担は、「お子様の運動やスポーツに関して、あなたはどのように思いますか」という設問の「活動にかかる費用の負担が重い」「応援や手伝いなどの負担が重い」という項目による。「とてもそう思う」「まあそう思う」を負担・重、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を負担・軽とした。これらはすべて母親による回答である。

#### <分析の手法>

まず、各独立変数と子どものスポーツ活動の状況について、クロス表を用いて分析する。小学生、中学生に分けて結果をみる。有意性の検定にはカイ二乗検定を用いて、危険率を5%として有意性を判断する。なお、保護者の負担については、最後に重回帰分析を用いた分析を行っている。

## 4. 結果

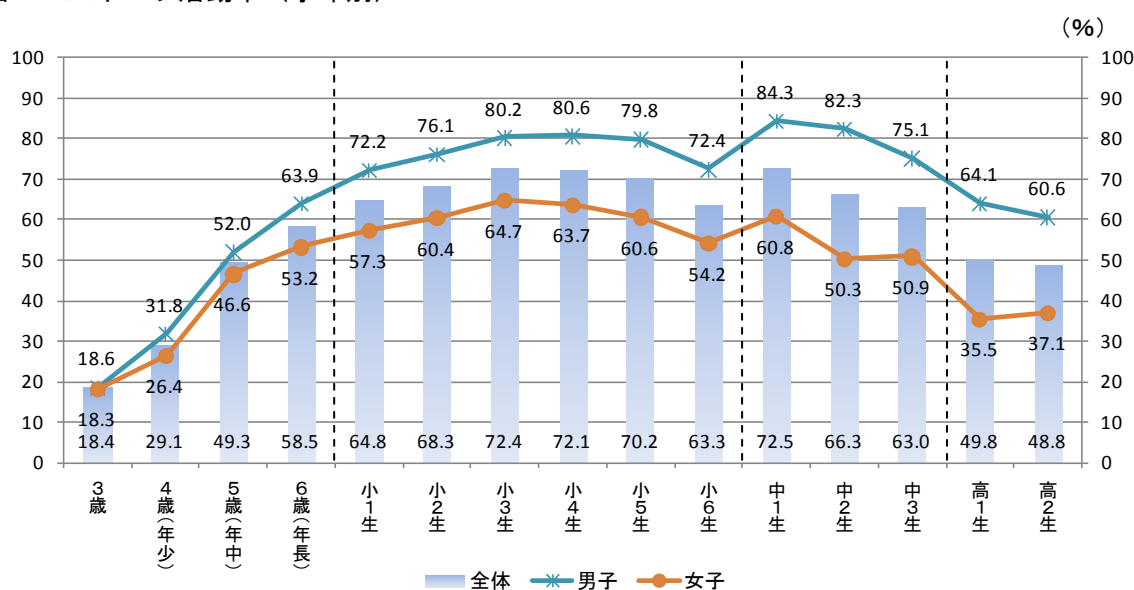
### <子どものスポーツ活動の状況>

まず子どものスポーツ活動の状況について基本的なデータを確認する。3歳～高2生のスポーツの活動率をみると（図1）、5歳（年中）で約半数を超え、小3生で7割強まで増加する。小学校高学年では若干減少するが、部活動が始まる中1生で再度7割強まで増加し、二度目のピークを迎える。全体的にみれば、小学校では68.5%が何らかのスポーツ活動を行い（参加者）、31.5%がスポーツ活動を行っていない（不参加者）。中学校では67.3%の生徒が何らかのスポーツ活動を行い（参加者）、32.7%がスポーツ活動を行っていない（不参加者）。

その活動の「場」に注目してみると（図2）、幼児、小学校段階は「民間経営」中心で、中学段階以降「学校の部活動」に移行する。

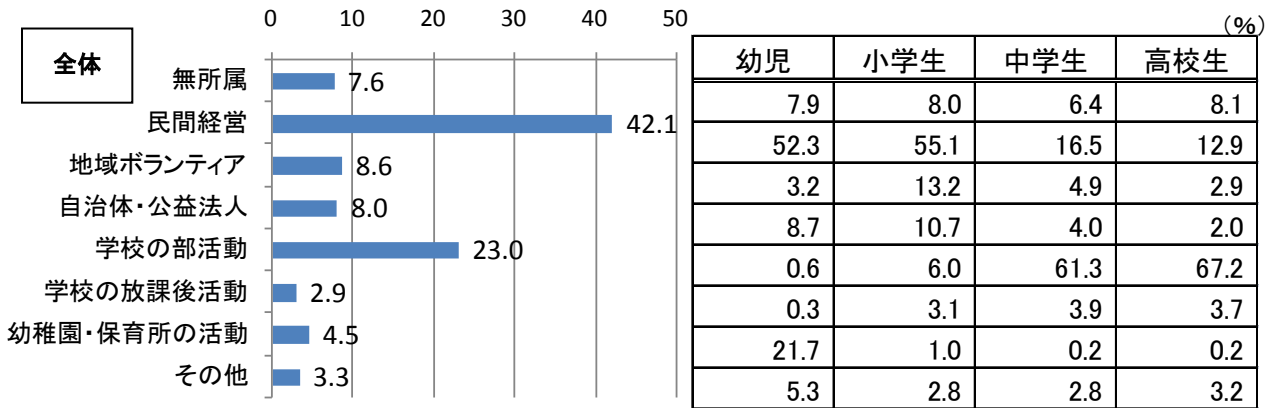
スポーツ活動に対する親の意識をみると（図3）、「子どもが身体を動かす機会を増やしたい」「子どもにとって運動やスポーツは必要だ」という回答（とてもそう思う+まあそう思う、以下同）は小学生、中学生ともにほぼ100%である。その一方で、「活動にかかる費用の負担が重い」「応援や手伝いなどの負担が重い」と感じる母親は小学生で6割強存在する。中学になるとその割合は低下し、5割強となる。多くの保護者は子どものスポーツ活動の必要性を肯定的にとらえ、機会を増やしたいと考えている一方、同時に子どものスポーツを負担にも感じていることがわかる。

図1 スポーツ活動率（学年別）



注1：スポーツの活動率は「この1年間で、お子様が定期的にしてきた運動やスポーツはありますか」という設問に対して、「その他のスポーツ」を含む26の選択肢のうち、いずれかを選択した%。

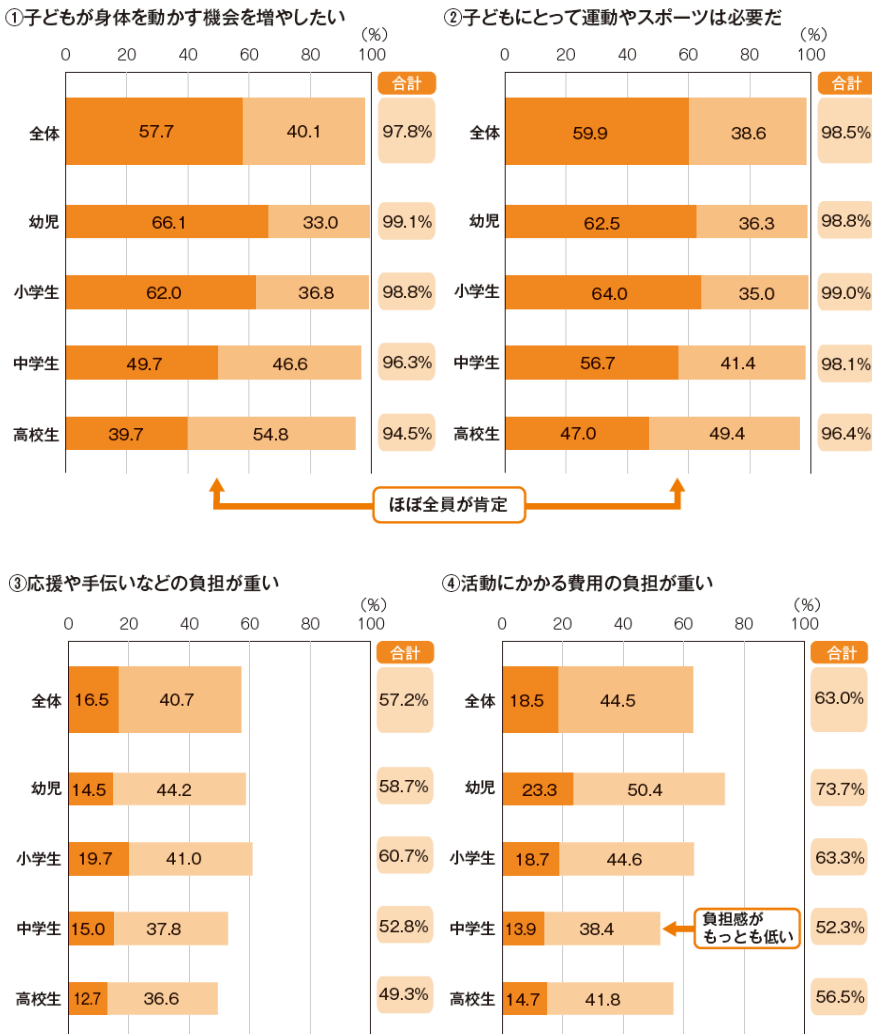
図2 幼児～高校生のスポーツ活動の「場」の変遷



注1：スポーツ活動をしている人の所属団体をすべて足し合わせて算出した。同じ人が複数活動している場合はそれぞれ1としてカウントしている。

注2：「無所属」は「団体には所属していない（保護者が指導・個人の趣味など）」、「民間経営」は「民間企業が経営する団体・教室」「個人が経営する団体・教室」を合わせた数値、「地域ボランティア運営」は「地域や保護者のボランティアが行っている団体・教室」、「自治体・公益法人運営」は「自治体が運営する団体・教室」「公益法人やNPO法人が運営する団体・教室」を合わせた数値、「幼稚園・保育所運営」は「幼稚園・保育所の活動（有料のもの）」を示す。

図3 スポーツ活動に対する母親の意識



## ＜子どものスポーツ活動と保護者にかかる負担＞

表1は子どものスポーツ活動と各独立変数のクロス表を用いた分析の結果である。まずは小学生の結果からみてみよう。投入した独立変数はすべて子どもの活動と有意な差がみられた。先行研究でも指摘されているとおり、性別によりスポーツ活動の選択行動と有意な差がみられる。家庭の世帯年収による差をみると、世帯年収が低い場合、スポーツ活動に不参加、世帯年収が高い場合、参加・民間経営の傾向がみられる。父親の学歴による差をみると、父親が非大卒の場合、スポーツ活動に不参加、父親が大卒の場合、参加・民間経営の傾向がみられる。母親の学歴による差をみると、母親が非大卒の場合、スポーツ活動に不参加、母親が大卒の場合、参加・民間経営の傾向がみられる。母親のスポーツ志向による差をみると、母親がスポーツ志向なしの場合、スポーツ活動に不参加、母親がスポーツ志向ありの場合、参加・民間経営または参加・地域ボランティア運営の傾向がみられる。

さらに、母親の負担をみてみる。費用の負担重群は、スポーツ活動に不参加、費用の負担軽群は参加・民間経営、地域ボランティア運営、学校の部活動などいずれかの「場」においてスポーツ活動に参加する傾向がみてとれる。同様に、応援や手伝いなどの負担重群は、スポーツ活動に不参加、負担軽群は民間経営、自治体・公益法人運営、学校の部活動などいずれかの「場」においてスポーツ活動に参加する傾向がみてとれる。この結果から浮かび上がるように、母親はスポーツの機会を増やしたいと考えている一方、スポーツ活動に伴うお金や時間の負担が足かせとなって、子どものスポーツ参加が妨げられているという可能性がある。

中学生の結果はどうだろうか。中学生の結果をみると、家庭の世帯年収、父母の学歴といった家庭の背景に関する独立変数は子どものスポーツ活動の状況に有意な差がみられなくなる。一方、子どもの性別、母親のスポーツ志向、費用の負担、応援や手伝いの負担などは、子どものスポーツ活動の状況にもたらず有意な差が消えない。

小学生と中学生の結果からみえてくるのは、1つは母親にかかる負担が子どもの活動にマイナスの影響を及ぼしている可能性である。つまり、「スポーツにはとてもお金がかかる」「子どものスポーツには親まで応援や手伝いなどにかかりだされる」状況を負担として強く認識した母親は、子どもの活動に消極的になってしまうということだ。ただし、母親の費用を負担に思う気持ち、応援や手伝いの負担に思う気持ち自体が家庭の世帯年収や母親のスポーツ志向の影響を受け、それにより子どもの活動に影響している可能性が考えられる。世帯年収が低く、限られた経済資源のなかであれば、スポーツ活動にかかる費用の負担をより重く感じるかもしれない。また、母親自身がスポーツを好きではない場合、子どもの応援や手伝いの負担をより重く感じるかもしれない。そこで、三重クロスによる分析により、世帯年収やスポーツ志向をコントロールして確認した。条件をそろえてみても、母親にかかる負担が子どもの活動に有意な差をもたらす結果が得られた。<sup>4)</sup>

さらに、小学生のスポーツ活動には家庭背景などの変数により有意な差がみられるが、中学生のスポーツ活動では家庭背景の変数による有意な差がみられなくなることがわかった。この点については、つづいての分析で各「場」の特徴をみながら、考えてみたい。

表1 子どものスポーツ活動状況のクロス表分析結果

		小学生					中学生				
		不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
子どもの性別	女子	51.1	35.1	5.2	5.8	2.7	53.3	7.0	1.7	1.5	36.5
	男子	34.9	40.9	13.5	7.5	3.2	24.5	7.8	2.3	2.1	63.2
有意差		***					***				
家庭の世帯年収	400万円未満	49.6	30.7	9.8	6.5	3.3	44.1	6.6	3.5	1.7	44.1
	400～800万円未満	42.6	37.9	9.8	7.0	2.8	38.9	7.6	2.2	1.9	49.5
	800万円以上	38.3	44.9	7.7	6.2	2.8	37.4	8.5	1.7	1.1	51.2
有意差		***					ns				
父親の学歴	非大卒	47.3	32.7	8.9	7.4	3.6	40.4	6.7	2.5	2.0	48.4
	大卒	39.2	43.5	9.4	5.6	2.2	38.3	8.3	1.5	1.6	50.3
有意差		***					ns				
母親の学歴	非大卒	46.8	33.5	9.6	6.6	3.5	40.7	7.4	2.3	1.8	47.9
	大卒	39.7	42.9	8.6	6.5	2.3	37.7	7.7	1.7	1.9	51.0
有意差		***					ns				
母親のスポーツ志向「身体を動かすこと」	なし	49.8	34.2	7.2	6.1	2.7	47.2	5.9	1.5	2.0	43.4
	あり	39.1	40.5	10.4	6.9	3.1	32.5	8.8	2.4	1.7	54.7
有意差		***					***				
費用の負担「活動にかかる費用の負担が重い」	重	55.5	33.6	4.7	4.5	1.6	56.5	8.6	1.7	1.8	31.3
	軽	20.3	46.0	17.5	10.6	5.7	20.4	6.1	2.3	1.7	69.5
有意差		***					***				
応援・手伝いの負担「応援や手伝いなどの負担が重い」	重	58.9	24.2	9.0	5.2	2.7	57.4	5.7	2.4	1.5	32.9
	軽	17.0	61.5	9.1	9.0	3.4	18.4	9.5	1.5	2.1	68.5
有意差		***					***				
サンプル数(人)		1,946	1,684	402	293	131	1,011	190	51	46	1,260
全体に占める比率(%)		31.5	27.2	6.5	4.7	2.1	32.7	6.1	1.7	1.5	40.8

ns p>0.05, \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

### <子どものスポーツ活動の「場」の特徴>

スポーツ参加者のみの回答から、スポーツ参加の「場」ごとに、母親にかかる負担の特徴を確認してみたい。費用や親の関わりについて母親にかかる負担の重さを「場」ごとにみたものが表2である。この結果は、実態ともほぼ対応している。5) 表3のように整理してみると、多くの「場」が費用の負担および応援や手伝いの負担のトレードオフになっていることがわかる。ただし例外は、中学の部活動であり、保護者にかかる負担は費用、応援・手伝いの両面で軽い。図2で確認したとおり、中学生のスポーツの「場」の中心は学校の部活動であり、この保護者にかかる負担の軽さからも、家庭の背景をのりこえてのスポーツ普及に貢献してきたといえるだろう。また、図3でみたように、中学ではスポーツ活動を負担にとらえる親が減少している。実態としても費用、親のかかわりの両面で軽い部活動の存在は、スポーツ活動の親にかかる負担減少に関係しているだろう。6) 小学校との対比でみると、この点がさらに明らかである。小学校のスポーツ活動は民間経営の「場」がその中心であるが、民間スポーツは応援や手伝いの負担は軽いものの、費用の負担が重い。小学生の場合、地域スポーツにしても、自治体スポーツにしても、学校スポーツにしても、費用の負担は軽いものの、応援や手伝いの負担がかかるものであり、中学の部活動のように費用、応援・手伝いの負担ともに軽い「場」がない。お金または時間のどちらかを求められる。このため、小学生のスポーツ活動では、先のクロス表分析でみたとおり家庭の背景により大きな差がみられることにつながっていると考えられる。

表2 子どものスポーツ活動の「場」の特徴（親にかかる負担）

(%)

		小学生				中学生			
		民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
費用の負担 「活動にかかる費用の負担が重い」	とても+まあそう思う	59.0 <sup>!</sup>	34.8 <sup>!</sup>	45.7	35.1	61.6 <sup>!</sup>	45.1	54.3	33.7
	あまり+まったくそう思わない	41.0	65.2	54.3	64.9	38.4 <sup>!</sup>	54.9 <sup>!</sup>	45.7 <sup>!</sup>	66.3
有意差		***				***			
応援・手伝いの負担 「応援や手伝いなどの負担が重い」	とても+まあそう思う	40.8 <sup>!</sup>	63.2 <sup>!</sup>	50.2	58.0	41.6 <sup>!</sup>	64.7 <sup>!</sup>	45.7 <sup>!</sup>	36.2
	あまり+まったくそう思わない	59.2 <sup>!</sup>	36.8 <sup>!</sup>	49.8	42.0	58.4 <sup>!</sup>	35.3 <sup>!</sup>	54.3 <sup>!</sup>	63.8
有意差		***				***			

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表3 子どものスポーツ活動の「場」の特徴（親にかかる負担）まとめ

	小学生				中学生			
	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
費用の負担	重	軽	軽	軽	軽	重	軽	軽
応援や手伝いの負担	軽	重	重	重	重	軽	重	軽

注1：「負担が重い」に「とても+まあそう思う」が50%以上の場合、「重」とした。「あまり+まったくそう思わない」が50%以上の場合、「軽」とした。

### <不参加者の母親の負担感>

子どもが参加する「場」の負担のとらえ方は、保護者のかかわりの実態と対応していた。それでは、不参加者の負担はどうであろうか。不参加者の負担の構造を把握するために、子どもおよび母親の属性、志向との関係を重回帰分析によりみてみたい。家庭背景についても、再度確認するために独立変数として投入する。使用する変数は表4、その記述統計量は表5に示したとおりである。さっそく、重回帰分析の結果をみてみると、次のようなことがわかる。

【母子の属性】子どもに兄弟がいることが、費用、手伝い・応援ともに負担とのプラスの関連がみられた。兄弟がいると、母親はスポーツに負担を感じやすい。母親の年齢は費用の負担にマイナスの関連がある（小のみ）。子どもが男子の場合、応援・手伝いの負担を感じやすい（中のみ）。

【母親の志向】費用の負担、応援・手伝いの負担ともに、「運動より勉強」という親の志向による影響が比較的強く、かつ有意な関連がみられた。「運動より勉強」志向の親は、子どものスポーツを負担にとらえやすい。この点については、家庭背景を統制したうえでも、活動への関連がみられている。

【家庭背景】費用の負担は世帯年収（小中）や母学歴（小のみ）など、家庭背景との関連がみられる。一方、手伝い・応援の負担は小学生においてのみ、かつ父学歴のみの関連がみられるにすぎない。

【モデルの説明力】自由度調整済みの決定係数は、費用の負担のモデルでは比較的高いが、応援・手伝いの負担のモデルでは低い。

表4 使用する変数の説明

母子の属性	男子ダミー	男子=1, 女子=0
	母親の年齢	母親自身の年齢
	兄弟ダミー	兄弟あり=1, 兄弟なし=0
母親の志向	運動より勉強志向	母親の意識を尋ねる質問項目の回答を逆転●
	母親のスポーツ志向	スポーツ志向あり=1, スポーツ志向なし=0
家庭背景	年収平均	世帯年収●
	父大卒ダミー	父親の最終学歴が大卒以上=1, 高校・専門学校まで=0
	母大卒ダミー	母親の最終学歴が大卒以上=1, 高校・専門学校まで=0



表5 使用する変数の記述統計量

母子の属性	男子ダミー	男子=1, 女子=0
	母親の年齢	母親自身の年齢
	兄弟ダミー	兄弟あり=1, 兄弟なし=0
母親の志向	運動より勉強志向	母親の意識を尋ねる質問項目の回答を逆転 <sup>7)</sup>
	母親のスポーツ志向	スポーツ志向あり=1, スポーツ志向なし=0
家庭背景	家庭の世帯年収	家庭の世帯年収 <sup>8)</sup>
	父大卒ダミー	父親の最終学歴が大卒以上=1, 高校・専門学校まで=0
	母大卒ダミー	母親の最終学歴が大卒以上=1, 高校・専門学校まで=0

表6 不参加者の負担感の構造についての重回帰分析

■小学生

	費用の負担			手伝い・応援の負担		
	回帰係数	標準誤差	標準化係数	回帰係数	標準誤差	標準化係数
男子ダミー	-0.016	0.018	-0.022	0.013	0.017	0.018
母親の年齢	-0.007**	0.002	-0.084	-0.001	0.002	-0.019
兄弟ダミー	0.057**	0.020	0.070	0.040*	0.019	0.051
運動より勉強志向	0.075***	0.014	0.128	0.081***	0.014	0.144
母親のスポーツ志向	-0.034*	0.017	-0.048	-0.053**	0.017	-0.077
家庭の世帯年収	0.000***	0.000	-0.180	0.000	0.000	0.001
父大卒ダミー	-0.037	0.019	-0.052	-0.053*	0.019	-0.077
母大卒ダミー	-0.039*	0.018	-0.053	0.000	0.018	0.000
(定数)	1.465***	0.091		1.152***	0.090	
サンプル数	1658			1658		
自由度調整済み 決定係数	0.082			0.032		
回帰のF検定	p=0.000			p=0.000		
*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001						

■中学生

	費用の負担			手伝い・応援の負担		
	回帰係数	標準誤差	標準化係数	回帰係数	標準誤差	標準化係数
男子ダミー	0.032	0.031	0.034	0.065**	0.031	0.072
母親の年齢	-0.005	0.004	-0.048	-0.003	0.004	-0.023
兄弟ダミー	0.086**	0.033	0.089	0.095**	0.033	0.103
運動より勉強志向	0.114***	0.022	0.170	0.123***	0.022	0.191
母親のスポーツ志向	-0.016	0.029	-0.018	-0.039	0.028	-0.047
年収平均	0.000***	0.000	-0.224	0.000	0.000	-0.062
父大卒ダミー	-0.042	0.034	-0.048	0.016	0.033	0.019
母大卒ダミー	0.021	0.032	0.024	0.022	0.031	0.026
(定数)	1.419***	0.179		1.155***	0.176	
サンプル数	844			844		
自由度調整済み 決定係数	0.096			0.051		
回帰のF検定	p=0.000			p=0.000		
*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001						

## 5. 考察

以上の分析から得られた知見のうち、とくに強調しておくべきことは次の2点である。

第一に、母親にかかる負担についてである。母親にかかる負担は子どものスポーツ活動に影響を及ぼす要因の一つだということが明らかになった。母親の負担のとらえ方は、家庭的背景や親の志向の条件をコントロールしても子どもの活動に影響を与えている。保護者への負担が増えることにより、その負担を媒介して子どもの活動が影響を受けることに対して、十分に考慮しなければならない。またそのときに注目されがちな費用の負担というような経済的側面だけではなく、応援や手伝いの負担というような時間的側面も重要な要素であることを強調したい。

第二に、子どものスポーツの「場」が果たしてきた役割についてである。小学校のスポーツ活動の「場」は保護者にかかる時間的負担または経済的負担のトレードオフになっている。現状としては、保護者の時間的負担はあまり伴わないが、多くの経済的負担を伴う民間経営の「場」が小学生のスポーツ活動の中心となっている。この点が小学生の活動において家庭的背景による差がみられた一つの大きな要因と考えられる。一方で、中学校の部活動は保護者にかかる経済的、時間的負担を軽減することにより、子どもの家庭的背景をのりこえたスポーツ活動の普及に貢献してきた。家庭・地域・学校の役割が見直される大きな流れのなかで、地域の熟練者に監督を依頼し、そのための費用負担が求められたり、部活動の手伝いや試合の同行など、保護者がかかわらざるを得ない状況になったりした場合、保護者の負担を媒介として、一部の子どもの活動が停滞する可能性を指摘したい。重回帰分析でみたように、運動より勉強に価値を置く母親、スポーツに対する傾倒が薄い母親が負担感を多く感じるようだ。

今後の課題としては、不参加者の負担の認識を高めている要因をさらに詳しく調べるが残るだろう。今回行った重回帰分析でも一定の結果が得られたといえるが、モデルの説明力は依然低いままである。この点は調査の限界でもある。調査で調べた参加・不参加の状況は、調査年度である2008年度の状況のみをたずねたものである。子どもの過去の経験とそれへの親のかかわり、親の情報収集方法、親の意識や価値観などにも依拠すると考えられる。このような点を調べて負担の構造を精緻化する作業は今後の課題としたい。

※本研究は、ベネッセ教育研究開発センターが駒澤大学片岡栄美教授、首都大学東京西島央准教授と共同で2009年に実施した「学校外教育活動に関する調査」にもとづく。

※本報告のうち、意見にわたる部分は報告者の所属する機関を代表する見解ではない。

### 注

- 1) 「親自身のスポーツ活動状況」や「親の志向」の影響は従来から指摘されてきた。
- 2) 「保護者にかかる負担」として、母親自身の回答による母親にかかる負担を代用している。今回の分析では、父親にかかる負担は含まれない。
- 3) 先行研究では、運動能力の自己認識や親の職業威信なども含めているが、今回は調査の項目に存在しないため、省略している。
- 4) 家庭の世帯年収と費用の負担、親のスポーツ志向と応援・手伝いの負担の三重クロスを行っても、費用や応援・手伝いの負担はスポーツ活動における有意な差がみられた(表7)。

表7 三重クロス分析の結果

小学生							中学生						
母親のスポーツ志向	応援・手伝いの負担	不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	(%)						
							母親のスポーツ志向	応援・手伝いの負担	不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
なし	重	64.9	20.5	7.5	4.7	2.4	なし	重	65.6	4.2	1.4	1.3	27.6
	軽	18.4	62.8	6.7	8.9	3.3		軽	21.6	8.3	1.7	2.9	65.4
あり	重	54.0	27.3	10.2	5.6	2.9	あり	重	48.7	7.3	3.4	1.8	38.7
	軽	16.1	60.7	10.6	9.0	3.5		軽	15.9	10.3	1.4	1.5	70.9

小学生							中学生						
世帯年収	費用の負担	不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	(%)						
							世帯年収	費用の負担	不参加	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
400万円未満	重	59.7	27.5	5.7	5.7	1.5	400万円未満	重	59.8	7.4	2.1	0.5	30.2
	軽	19.4	40.6	22.3	9.1	8.6		軽	14.1	5.1	6.1	4.0	70.7
400～800万円未満	重	55.4	33.4	5.1	4.6	1.5	400～800万円未満	重	55.4	9.2	2.1	1.9	31.4
	軽	16.5	47.0	19.5	11.7	5.3		軽	18.9	5.5	2.3	1.8	71.5
800万円以上	重	48.9	42.9	3.7	3.0	1.5	800万円以上	重	55.7	9.7	1.7	1.7	31.3
	軽	25.4	47.3	12.6	10.2	4.5		軽	23.8	7.7	1.7	0.7	66.0

5) 表8は、民間運営、地域ボランティア運営、自治体・公益法人、学校の部活動のそれぞれに参加する親が実際にどれくらいの時間を費やし、お金を費やしているかをみたものだ。小学生の場合、子どもの練習や試合を見に行く頻度(「週に1回以上」＝週に1回+週に2回以上)は、民間運営の場合は約3割(29.7%)、地域ボランティア運営は約4割(42.5%)、自治体・公益法人は約35%(34.5%)、学校スポーツは約1割(9.2%)と、「場」により親の関わりにはばらつきがある。同様に、スポーツにかかる費用をみても民間運営の場合は6,824円、地域ボランティア運営は2,864円、自治体・公益法人は3,689円、学校スポーツは978円である。

中学生の場合、子どもの練習や試合を見に行く頻度(「週に1回以上」＝週に1回+週に2回以上)は、民間運営の場合は2割強(21.6%)、地域ボランティア運営は3割弱(27.5%)、自治体・公益法人は3割弱(28.3%)、学校の部活動は1割弱である。スポーツにかかる費用をみても民間運営9,829円、地域ボランティア運営3,786円、自治体・公益法人5,976円、学校スポーツ2,518円である。

小学生、中学生のそれぞれの「場」を相対的に比較すると、母親の負担に関する回答とほぼ一致するが、小学段階の学校の部活動に関してのみ、実態と母親の負担の回答が異なる結果がでていいる。母親の回答によれば、小学校の部活動に子どもが参加する場合、母親の費用負担・軽、応援・手伝いの負担・重となっているが、表8の実態をみる限り、子どもの練習や試合を見に行く頻度は高くない。この点については、別途実態を調べる必要があるが、練習や試合を見に行く頻度は多くなくても、運営の手伝いや送り迎えなどでの関わりが多い可能性が考えられる。

表8 子どものスポーツ活動の「場」の特徴(かかる費用・親の関わりの実態)

		小学生				中学生			
		民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
スポーツにかかる費用(円)		6,824	2,864	3,689	978	9,829	3,786	5,976	2,518
		(円)				(円)			
		小学生				中学生			
		民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動	民間経営	地域ボランティア運営	自治体・公益法人運営	学校の部活動
子どもの練習や試合を見に行く頻度	ほとんどない	21.6	5.5	15.7	32.8	22.1	17.6	15.2	24.4
	年に1～2回	7.7	5.2	5.1	10.7	16.3	7.8	10.9	16.7
	年に数回	21.8	13.4	19.8	19.1	22.6	17.6	19.6	31.7
	月に1回	11.5	12.4	11.6	9.9	6.8	11.8	13.0	11.0
	月に2～3回	7.7	20.9	13.3	18.3	10.5	17.6	13.0	10.1
	週に1回	23.9	19.4	23.5	2.3	13.7	17.6	19.6	3.7
	週に2回以上	5.8	23.1	10.9	6.9	7.9	9.8	8.7	2.4
有意差		***				***			

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

6) 中学生で応援や手伝いの負担が減ることについては、子どもの発達段階の影響も考えられる。しかし、注5にあるように中学生の活動の中心である部活動は、保護者のかかわりについて小中学生の他のどの「場」よりも負担が少ない。

7) 家庭の世帯年収を尋ねた設問に対する回答をもとにした。200万円未満=1,000,000, 200~400万円=3,000,000, 400~600万円=5,000,000, 600~800万円=7,000,000, 800~1000万円=9,000,000, 1000~1500万円=12,500,000, 1500万円以上=17,500,000のように置き換えて投入している。

8) 母親のスポーツに関する意識を尋ねた「お子様の運動やスポーツに関して、あなたはどのように思いますか」の「運動やスポーツをするよりももっと勉強してほしい」に対する回答を用いた。とてもそう思う=1, まあそう思う=2, あまりそう思わない=3, まったくそう思わない=4という回答を逆転して投入した。

## 参考文献

ベネッセ教育研究開発センター, 2009, 『子どものスポーツ・芸術・学習データブック』。

ベネッセ教育研究開発センター, 2010, 『学校外教育活動に関する調査報告書』。

片岡栄美, 2010, 「子どものスポーツ・芸術活動の規定要因—親から子どもへの文化の相続と社会化格差—」, ベネッセ教育研究開発センター, 『学校外教育活動に関する調査報告書』。

中澤篤史, 2008, 「青少年の学校／地域スポーツの参加と家庭背景—質問紙調査の分析を通して—」, 日本スポーツ社会学会 第17回大会発表資料。

西島央編著, 2006, 『部活動 その現状とこれからのあり方』, 学事出版。

西島央, 2010, 「担い手からみるスポーツ・芸術活動の分断と格差」, ベネッセ教育研究開発センター, 『学校外教育活動に関する調査報告書』。

山口泰雄, 池田勝, 1987, 「スポーツの社会化」, 『体育の科学 37』。